
魔法少女リリカルなのはStrikerS 変わらないもの

時計屋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers 変わらないもの

【Nコード】

N0414Y

【作者名】

時計屋

【あらすじ】

一人の女性が紡いだ予言は、一つの強大な組織に警鐘を鳴らす。その予測された未来を回避する為、遺失物管理部に新たな部隊が設立される。その部隊を中心として、様々な事件が発生する。果たして、その先に見えてくる真実とは……。

——拙作は“魔法少女リリカルなのは”の世界観、諸々の原作設定に対し、独自解釈や設定の捏造を多分に含みます。それに伴い、原作から激しく逸脱した内容になる可能性があることを先に申し上げます。——

プロローグ（前書き）

拙作は私の処女作となりますので、色々と至らぬ点もあるかと思
います。文法の間違いや誤字・脱字等が御座いましたら、指摘して
頂けると助かります。

プロローグ

煌々として燃え盛る炎がミッドチルダの夜空を赤く染め、天高く立ち上る黒煙は見る者の不安を煽る。此処からだとな人の姿は針の先のようにも感じるが、それでも男にはあの場の喧騒が風に乗って聞こえていた。

湾を挟んだ先にある臨海第八空港が騒然としているのは、ここから見ても明らかだった。つい先ほどまで通常通り機能していた空港には、平日の夜とはいえそれなりの数の人間がいたはずだ。建物全てを包み込む炎の勢いは凄まじく、空港は文字通り火の海だ。あれを見る限り、一般の救助隊では手に余るだろう。近隣の陸士部隊も駆け付けて来ているようだが、事態が好転しているようには見えない。管理局の慢性的な人員不足が、今まさに顕著に現れていると感じた。

増援として首都航空隊の航空魔導師が出向くはずだというのは、男の隣に立つ男性――ティーダの言葉だ。そしてそれは、各種の継続きを済ませた上で、やっと出動するらしく、訪れるまでまだ暫く時間がかかるらしい。

燃え盛る炎は衰えることを知らないかの如く、今なお空港全体を多い隠さんと勢いを強めている。そんな中、星空さえ遮る黒煙を背景に、漆黒の空に二筋の光が走るのが見えた。それぞれ黄色とピンク色をした二色の軌跡は、途中で別れると空港内部に吸い込まれていった。

光の色は個人の魔力光によって違いはあるものの、あの光の尾は航空魔導師が高速飛行時に残すものだ。基本的に無色透明というこ

とは有り得ず、つまりは二人の魔導師が到着したことを示している。しかし、この規模での火災で増援が二人とは如何なものか。男は「あれだけか？」と眉を顰めて訝しむ口調で、魔導師が突入した空港を眺めて誰にともなく尋ねた。

「……航空隊の魔導師にしては数が少ないな。彼らであるなら、少なくとも小隊単位で訪れるはずなんだが……」

男の疑念を聞いたティーダが、怪訝な調子で言う。全身を覆うような形でフードを被っている為、こちらから窺えるのは露わになっている顔だけだ。それにしても、右目を隠すように伸ばした前髪により、男の位置からでは詳しい表情は見えない。唯一、口元に指を沿わせて、考える仕草をしているのは見て取れた。

男はそんなティーダの様子をちらと横目で伺い、言われてみればその通りだと納得する。管理局の魔導師部隊が、基本的に4人前後の小隊で行動するのが常であるのは知っている。そして、ティーダの言葉を受ければ、それは首都航空隊も例外ではないようだ。

心なしか空港が先ほどより騒がしくなった気がする。パツと見に大きな変化はないが、少数ながら航空魔導師が到着したことで、少なからず勢い付いたのだろう。尤も、主観による推測なので、確信と呼べるものは何もないのだが。

「何にせよ、二人とはいえ空戦魔導師が来たんだ。本隊が来るまでの繋ぎにはなるだろう」

それに、と男は思う。今更ながら、あの二色には見覚えがあったのを思い出す。もし自分の予想する二人であるなら、純粹に魔導師としての能力を見れば、これほど心強いものはないだろう。

「ああ、だといいいんだが……」

隣に立つティーダが身動ぎした気配を察する。恐らく顎から指を離したのだろう。それと共にどこか歯切れの悪い言いように、男は徐に隣を向く。あまり気にするな、と言おうとしたのだが、ティーダも同じようにこちらを見ており、二人は真正面から向かい合う形になった。

ぶつかったティーダの青い瞳の中、僅かにくすぶる憤りの色を見つけた男は、言おうとした言葉を飲み込む。彼はそういう奴だったな、と内心で苦笑しつつ、ティーダに会話の先行権を譲る意味合いを込めて口を噤む。何う視線を寄越したのも束の間、男の意を汲み取ったらしいティーダは、横目で空港を一瞥してから口を開く。

「イーリス、やはり俺には静観することはできない」

若干の焦りが含まれる調子でティーダが言う。口に出して余計に意識してしまったのだろう。今にも飛び出していきそうな雰囲気、まくしたてるような口調で続ける。

「君や俺の立場がどんなものかは理解しているつもりだ。しかし、今この瞬間にも――」

「分かった」

男――イーリスはティーダの言葉を静かに遮って小さく首肯する。ティーダの言わんとしていることは、これまでの付き合いで予想はできていた。

急に台詞を遮られた当の本人は、言われた言葉の真意を掴めない

のか、怪訝な表情を禁じ得ないでいた。イージスはそんなティーダの様子から心情を読み取り、ポーカーフェースを苦笑気味に変えて言う。

「民間人を助けに行く、と言うんだろ？ 最低限留意すべき事項を守るなら、お前の行動に制限は付加しない。隠蔽方法は任せる、行つてこい」

寄せられていた左の眉が、何時の間にか驚きに目を見開いていた。だが、それが伺えたのも束の間、ティーダは眉尻を下げた申し訳なさそうな表情で、一言だけ口にする。

「すまない……」

呟くようなその一言の中に言葉通りの意味の他、感謝の意が込められていることは、イージスには分かっていた。ティーダが感謝の言葉を口にしなかったのは、おおかたこの行為によって自分にどんな非が下るか、そんなことを考えたからに違いない。正義感の強い彼のことだ、自分の行動のせいで他人が非難されるのに抵抗を感じ、自責の念から謝罪の言葉が出たのだろう。

イージスはティーダの内心をそう想像し、今度は意識せずに小さな笑みを浮かべる。言外に気にするなと含めた表情の後、ちらと空港を見やって言葉を紡ぐ。

「あの様子じゃ余裕はあまりないだろう——行つてこい」

「君には本当に迷惑を掛ける……」

ティーダがイージスの言葉に体を空港に向け、自分が着ている物と同じ薄汚れたフードの懷から、青く縁取りされた一枚のカードを

取り出す。

丁度そのとき、空港の一部が爆発し、黒煙と共に炎を吹き上げた。それに倣うように、各所で爆発らしき小規模の閃光が発生し、火災は益々勢いを増す。内部の状況は想像するより他ないが、爆発によって内壁が崩壊した可能性がある。人が残っているのなら、一刻の猶予もないのは明白だった。

「ッ、落ち着いたら例の場所で落ち合おう！」

それを見たティーダの表情は一変し、取り出したカード――正確にはデバイスの待機状態――を振り下ろして起動させる。

ここで言うデバイスとは、魔法を扱う際にその補助として用いる機械を指す。使用用途によって幾つかの種類に別れるが、ここでティーダ取り出したのは“ストレージデバイス”と呼ばれるものだ。純粋な道具としての使用を目的としたそれは、目立ったクセの無い最も代表的なデバイスと言える。

赤み掛かったオレンジ色の光にティーダが包まれる。しかしそれは一瞬のことだった。光が収まったときには彼の服装は一変し、手には一本の杖が握られていた。

その服は全体的に落ち着いた色合いをしていた。一見するとロングコートのような濃紺の服の上から、鈍く光る銀色の胸当てを付けている。白を基調とした杖は、長さは1m弱、先端部が金色の音叉状に別れている。この服はバリアジャケットと呼ばれる魔力で構成された防護服であり、右手に持つのが起動状態のデバイスだ。

ティーダは装備の展開を一つの動作で終わると、コートの裾を翻

して飛び立つ。そして、魔力を視覚されないよう、必要最低限の量だけを身に纏い、海上を水面すれすれで飛行して行く。

来たるべき航空隊の増援に備え、管理局の注意は上空に向いている筈だ。加えて火災で手一杯の彼らが、余所に目を向ける余裕はないだろう。余程目立った行動を取らなければ、簡単には発見されることはない。そう考えるイージスの思考を裏付けるように、管理局にはティーダの接近に気付いたような雰囲気は伺えなかった。

突如何の前触れもなく、空港の中央部付近から、天に向かってピンク色の細い柱が立った。それはティーダが何事もなく空港に到達したのを見届け、先に合流地点へと向かう為に踵を返し掛けた時だった。

柱の正体が砲撃魔法だと気付くのに時間は要らなかった。恐らく、先刻突入した魔導師の一人が放ったのだろう。続いて空港から脱出する光も見え、砲撃の質と魔力の色も踏まえて、彼の当初の予測は確信に至った。

「あゝら、計画性の欠片も見えない脱出方法ですねえ」

遠くの喧騒だけが僅かに聞こえていただけの空間に、間延びした女性の声が響く。その声にイージスはピクリと僅かな反応を示すと、ゆっくりと振り返った。

イージスが立っているのは、既に使われていない港の埠頭だ。この港は臨海第8空港の開設と同時に廃棄されており、付近には人が住める住居などない。それらのこともあり、普段は昼間から森閑としている。

視界には相変わらず、打ち捨てられ錆び付いた倉庫が整然と立ち並んでいる。辺りが暗いこともあるが、人の姿など影も形も見えない。だが、それこそが“彼女”の能力であることを知っているのも、イージスは驚きを面にすることはなかった。

振り返った彼の目の前に、一人の女性が何の前触れもなく姿を現した。女性は茶色の髪を三つ編みのおさげにし、体のラインを強調する濃紺のボディスーツに白いケープを羽織っている。その出現方法は、あたかも透明な空気の幕から、不意に現れ出る様なものだった。

前もって予期していたとはいえ、思わず声が漏れそうになった。しかし、何とかそれを堪えたイージスは、浮かべた苦笑で内心を誤魔化す。些細なこととはいえ、弱味を見せるのは嫌だった。

5mも離れていない距離に立つ女性――クアットロは、イージスの背後の空港をちらと伺ってから、彼と視線を合わせる。そして、まるで最初からそこに居たかのような飄々とした態度で、眼鏡の下に違和感のない笑みを浮かべた。

その愉しげな笑みに、イージスは不意に背筋に冷たいものが走るのを感じた。日常で今の笑顔を見ても、自分はこんな感覚は覚えない。それでも、あの悲惨な空港火災の状況を見て、彼女は何か可笑しな物を見たかのようにだった。冷酷、イージスの脳裏にその単語がよぎった。

「空港の方は随分と大変そうですね。イージスさん、あなたは行かなくていいんですかあ？」

そんな彼の内心を知らないクアットロは、やはり緊張感のないの

んびりとした口調だ。他人事、その一言で済まされそうな態度で、変わらず笑みも浮かべてもいる。

彼女の語感にイージスの苦笑が僅かに深まる。彼女がいつから見ていたのかは知らないが、少なくともティーダが空港に向かったのは知っているようだ。しかし、それでも何も言わなかったのが、こちらを信頼しての行為でないことは、自分たちの置かれた立場なら分かりきったことだった。

「既に御存知のようですが、空港の方にはティーダが向かいましたので。……クアットロさんは何でこちらに？」

次いで浮かんだ疑問を尋ねてみる気になったイージスは、疑念の表情をクアットロに向ける。

「私は“例の物”を自分の目で確認しに来ただけです。誤報と言うこともありますしい」

クアットロは言いながらゆっくりと歩き、イージスの傍らに並び立つ。「でも」と続けるクアットロの視線は、真っ直ぐ空港に向けられている。横目で様子を伺うイージスは、彼女の次の言葉を待った。

「あの様子じゃそれはなさそうですね。本当、とんだ無駄足でした」

クアットロは呆れ顔で肩を竦めてみせる。何を期待していたのか、その口調にはどこか落胆の色も見えた。

イージスが思わず苦笑を漏らし掛けたとき、視界の端にある空港

から、大きな魔力反応を感じた。傍らのクアットロはわざとらしい驚きの表情をしており、イージスは何事かと空港に振り返った。

相変わらず空港は火の海で、鎮火の様相は欠片も伺えず、吹き出す黒煙の勢いは衰えていない。当たり前だが突入したティードの姿も確認できず、いたとしてもここから判別できるものではないだろう。

そのもくもくと立ち上る黒煙を背景に、この魔力反応の原因と思われる魔導師が、空中で白い魔法陣を展開していた。それを遠目に見た瞬間、イージスは驚きの表情を隠しきれなかった。

大きすぎる魔力反応もこれで納得がいった。白い魔導師は自分の知る人物だと、そう確信に似た気持ちをイージスは抱く。同時に、遠目だが自分の記憶と大差ない様子に、自然と口元が緩みそうになった。

空中に滞空していた魔導師が、空港に大規模な氷結魔法を放つ。それにより、見える範囲で空港の4分の1の炎が、あつと言う間に消火される。持ち味の広域魔法は健在のようだった。

「ほーんと、桁違いのバカ魔力なこと」

それを見たクアットロは言い捨てた後、関心をなくしたように踵を返す。

「私は先に帰りますねー。もう用はありませんし、興味もなくなりましたから」

言うが早いか、クアットロはイージスが何か言う間もなく、姿を

消していた。

しばし呆然としてしまったイージスは、直ぐにハツとして気を取り直す。改めて空港に意識を向けると、そこから向かって左側に航空魔導師の編隊が接近するのが確認できた。

ようやく到着したか、と一安心したイージスは、今度こそ合流地点に向かおうと踵を返す。ティードも増援が来たと知れば離脱するだろうし、ここに長居は無用だ。僅かに名残惜しい気持ちを抱きながら、沈静に向かいつつある空気を背後に感じつつ、イージスは心持ち急いでその場を後にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0414y/>

魔法少女リリカルなのはStrikerS 変わらないもの

2011年11月16日02時40分発行